

爾聞けば九左衛門の直筆ではなかつた。

『さうでせうかな』

『さうだす位なら、私も九左衛門さんの手は知つて居りま、代筆さすのやつたら源十郎さんが居やりまするがな、此筆蹟は源さんでもおまへんで』

『さうです、違ひます』

『違ひますやろ、但馬屋さんから来たのやおまへんで、安心しとんなはれ、私が圓満う納めま、大事な命やが首でも賭けて置さま』

『何分よろしう』

清十郎は泣きたいほど嬉しかつた。また元の清十郎に成れる、お夏と毎日顔が合せる……思ふと見るもの聞くものが皆嬉しかつた。朝餉を馳走になつて、『何分よろしう』を何遍となく繰返して、橋

本屋を出たのは彼れ是れ四つ時分であつた。

『短氣を起さんと吉報を待つとんなはれや』

二度も三度も云つた吉兵衛の聲がまだ耳に残つて、大阪の町を歩く足が何となく軽かつた。

四ツ橋まで戻りかけて清十郎は突と立ち止つた。折角大阪へ出て来たのだから、お三にもお俊にも何か土産物を買つて行つてやらうお三もお俊も何那に悦こぶか知れん、布片ものが好からうか、頭物が好からうか。

財布を開けて見ると朱銀も光つて居た、序に道頓堀へも廻つて見やう、思ひながら橋を渡りかけると、後方から誰やら呼び止めるものがあつた。

『清さん、清さんぢやないか』

振回つて見ると其れは但馬屋の源十郎であつた。

「源さんちやありませんか」

「仍且清さんか」

二人は思はぬ奇遇を悦んで、

「何時大阪へ？」

「昨夜來た」

「そして、川口の橋本屋が宿ではありませんか」

「這度は宿は取らん意で、昨夜も船で寝た」

「そして大阪へは何用で？」

「お夏さんの嫁入道具を誂えに來た」

何心なく云つて源十郎は突と口を噤んだ、清十郎とお夏との關係を知つて居たからであつた。

「それではお夏は……」

清十郎は源十郎の顔ばかり瞞めた、襦袢姿のお夏が龍野と祝言の杯を交す様子が見るやうに眼前へ浮んだ、同時に命が掌の中を抜け出したやうにも思える、執着と嫉妬の焰火が燃えた。

けれどまた、心の何處やらから水を掛けて呉れるものがあつた、それはお三であつた、「私にはお三が居る、温順い、貞節な、女房のお三が居る、お夏が何だ」お夏の缺點を有りたけ列べて見たかつた、浮氣っぽい、氣儘な、容色を鼻にかけた……でも仍且お夏の方

が好かつた。

白熱的なお夏の情緒、海棠が牡丹櫻のやうな其面貌は、お三の何處に認められやう、梅花か、梨花かのやうな清楚なお三は、迎もお夏の比較物ではなかつた。殊に異性に對する、最初の印象——初恋——がお夏である、自分の所有物と思つて居たお夏、死んでも別れまいと誓つたお夏を、まざく他人の手に渡すことは清十郎には忍び難い苦痛であつた、未練と執着とが油となつて嫉妬の焰へ注いだお三の思ひ出から来る水は反て焰を煽り立てる具に過ぎなかつた。

『そ、それでは、お夏、お夏さんは』

清十郎は聲も滑かに出なかつた。眼色の變つて居ることも源十郎には好く分つた。

『お夏さんは、お芽、お芽出度いのですな』

云つて、清十郎は笑つた、地獄の人の笑ひ方であつた、笑ふ端から湯のやうな涙が零れて居た。

『清さん、これには深い理由がある、腹の立つのも道理ぢやが、お夏さんも可哀さうだ、まあ氣を鎮めて』

四邊を見て、

『此處では咄も出来ん、何處ぞ静な處で一杯やりながら咄さう、清さんとも久濶ぢや』

源十郎は賺すやうにして清十郎を小料理屋の二階へ連れて上つた

源十郎の話によると、清十郎はまだ牢舎に入つて居ることになつて居た。

「橋の上で清さんに逢ふた時、私は幽霊ではないかと思ふたほどぢや」

さう云つて源十郎は更に清十郎を見直した。

「私がまだ牢舎に居る？、そして勘さんはまだ姫路へは往にませんか」

「勘十郎が戻つて来たからこそ、清さんが牢舎へ入れられたことが分つたのぢや」

「それなら勘さんは、私が牢舎から出たことを云ふて呉れないのですか」

「聞かなんだ、何でも勘十郎の話では……、清さん怒んなさんなよ」

怒つて貰ふと話が出来ん

清十郎は黙つて首肯して見せた。

「勘十郎の話では、清さんは人殺しをして牢舎へ繋がれて居たから近い間には磔刑になるぢやうといふことで」

「私の人殺し？、あの磔刑？、勘十郎め……」

「そ、そ、それが可かんのぢや、誰が何と云はふと、清さんが人殺しや盗みをしなかつたら好いのぢや、まあ聞きなさい、恚う云ひ出したからには何も彼も云ふて了はにや得心がゆくまい」

「源さん、頼みます」

清十郎は両手を顫はせながら膝を進めた。

源十郎の話は恚うであつた。

勘十郎が大阪から戻つて来るまでは、お夏はまだ一縷の望みを抱

いて清十郎を待ち焦れて居た。水間から何等の便のないことが、清十郎の無事であること、やがて詫を入れて戻つて来る下地である事と信じて、それを唯一の頼みに待ち遠い日を送らねばならぬほど、精の盡きた、心細い身の上ではあつたが、其れでもお夏は其れを一本の命綱として一日一日と指を繰つて待つて居た。

其間に四五日といふ日數が経つて、商賣に出た勘十郎が大阪から素晴らしい勢ひで戻つて來た。豫想より二三割高の利益を持つて來たことが、勘十郎には曾てないほどの得意であつた、そは九左衛門の歡心を購ふべく十二分の代價であつた。

其夜、例によつて家族が臺所の一間で夜食の膳に向つた。成功祝ひに勘十郎の慰勞を兼ねて、長松のお膳にまで馳走が載せられてあつた。源十郎、勘十郎其他の手代には無論酒が出た。

「勘十郎、今夜は皆お前のお相伴ぢや、遠慮せずにご過して呉れ」
 九左衛門は至極の上機嫌でお夏に給仕をさせて居た。源十郎も「勘さん、お蔭で御馳走になります」と椰楡半分に云つたりした。

勘十郎はもう崩れそうな顔になつて、お夏の方へ絶えず秋波を使つて居たが、やがて懷中から七十兩の服紗包を出してお夏の前へ押しやつた。

「お夏さん、それは委託り物ですから中を驗めて受取て貰ひます」
 お夏は一ト目見て顔色を眞蒼にした、清十郎に呉れてやつた七十兩の包が、勘十郎の手から舞ひ戻つて來る意外さよりも、清十郎に異變のあつたことを電光のやうに感じたからであつた。死人のやうな色目をしたまゝ、お夏は包と勘十郎の顔ばかり見比べて居た。

勘十郎は態と判然した聲で云つた。「其包の中に小判で七十枚ある

「等です、清十郎はあなたから貰ふたやうに役人の前で云つたさうで真偽は兎も角、役人から橋本屋へお下渡しになりましたのを、橋本屋から更に私が委託つて参りました、役向からの吩咐ですから正に受取つたといふ證書を願ひいたします」

お夏は服紗包を見詰めたまゝ、口も利かず、身動きもしなかつた。

「そのまゝ、お夏さんは呼吸が止つて、赤い掛物をかけた人形に化つたのぢやないかと心配した」と、源十郎が詞を添えた。

四六

物語が續く。

「清十郎が役人に何うしたツ？」

九左衛門が先づ急ぎ込んで訊いた。勘十郎は待ち受けたといふ様子をして、

「清十郎は旦那さん、人殺しをして牢舎へ打ち込まれました」
居合す人の總てが驚異の眼を睜つた。

「清十郎が人殺しをした？」

「清さんが牢舎へ？」

口々に恚う云つて互に顔を見合つた。

嵐の前のやうな静さが少時續いた。

お夏も驚異の眼を瞠つた一人であつた。人形に魂が吹き込まれたやうに、俛向いた面が屹と擡げられて、露んだ眼が沈着もなく光つ

た。

「何處で人殺しをした？」

「何時？」

「誰を？」

質問が方々から起つた。

「それは聞き洩らしましたが、何でも遠からず磔刑にされるさうで」

勘十郎が云ひ終らぬ間に、布を裂くやうな悲鳴が居合す者の鼓膜を刺した、それはお夏であつたことは、お夏が薄縁に俯伏せて居たので分つた、美しい鬘が行燈の灯影で顫えて、咽び泣の聲が哀しく屋の内に籠つた。

視線が一齊にお夏の方へ注がれたが、續いてまたぞめきが初まつ

た。

「磔刑にされる」

「清さんが磔刑」

「あの清さんが」

「あの磔刑に」

酔も興も醒め切つて其日の夜食は終つた。噂は翌日を待たず但馬屋の入口を出て、口から耳へ、耳から耳へ、人から人、町から町へと走つて、二日も経たぬ間に城下一圓の噂となつた。

「但馬屋の清さんが人殺しをしたげな」

「磔刑にされたげな」

「もう鼻首になつたげな」

と四日目には噂が恁那風に鼓張されて、但馬屋の入口から逆に傳

はつて来た、それを聞く毎にお夏は身も世もあられず泣いた。
「ト目逢ひたい、清十郎の息ある間に、たつた、たつたト目で
み逢ふて死にたい」

これがお夏の希望の總て、あつた、或時は人の寢沈まつた真夜中
に、寢床を忍び出やうとして父親に押へられた、或時は風呂場から
裏門へ抜け出やうとして、お玉に喚かれて勘十郎に捉へられた。抜
け出さうとする者と、抜け出させまいとする者との争ひが間斷なく
行はれた。

龍野との縁談が急激に進捗したのも、一つは夫れが導火線であつ
た。「聲さへ来たら娘の氣も變らう」といふのが九右衛門の親心で
ある、「娶ひませうと云へば父親が安心する、安心は聽て油斷であ
る、其隙に抜け出さう」といふのがお夏の智慧であつた。

清十郎の息ある中に、磔刑にならぬ前に……逢ひたいと思ふお夏
は父親の油斷を一刻も早かれと冀つた、娘の氣心の變らぬ内に……
と九右衛門は婚期を無闇と急いだ、源十郎が大阪へ出て来たのは其
結果に外ならなかつた。

「こつちいふ事情ぢやから清さん、決してお夏さんを怨んではなりま
せんぞ、可哀さうなと思ふ分とも、怨む事は微塵もない筈ぢや」
源十郎は宥めるやうに云つて杯を献した、
清十郎は泣いて居た。

お夏の胸の中を酌んでも哀しかつたが、それよりも清十郎は勘十郎の仕草を怨んで泣いた。朋輩甲斐のないどころか、八ツ裂きにしても足らぬ仇敵であつた。假に但馬屋で詫を聞き届けて貰つたところで、城下の人へ何う顔が合せやう。

「但馬屋との縁も切れた、お夏とももう同家には住めん」さう思ふと此世に生き永らえる氣もしなかつた、それもこれも勘十郎のお蔭である、一度逢ふてお禮を云つて死なう、お夏にも一ト目逢ふて……。

「源さん、私が一生のお願いです、唯た一ト目で好いからお夏さんに逢はせて下さい、仇には思ひません」
手を合はさぬばかりにして、清十郎は泣いて頼んだ、源十郎は快く承諾した。

「宜しい、逢はせて上げやう」

「逢はせて下さるか」

「お夏さんも逢えたら本望であらう、安心なさい私が屹度逢はせる」

「源さん、何にも云ひません此通りぢや」

清十郎は泣いて拜んだ。

其翌朝、源十郎の乗つて来た船が川口を出た、船には菰包にしたお夏の嫁入道具と、清十郎が乗り合せて居た。

「お夏さんの嫁入道具と乗合せるのも、盡きぬ縁があるからではあらうが、這度逢ふたら夫れを最後にぶツつりと切れて貰はんことには、清さん私の立つ瀬がないで喃」

源十郎は爾云つて清十郎に最終の逢ふ瀬であるべく誓はせた。清

十郎も其時は心底爾思つた。

「源さんの恩義に對しても切れずには居れません」

「それでこそ清さんちや、私も仲へ立つ甲斐があるといふものぢや」

船が飾磨へ着く前に源十郎はお夏との密會場處を相談した、それは裏の土藏の中が好からうか、裏門から外へ出た土塀の蔭が好からうか、迎もお夏を但馬屋から誘ひ出す譯には行かなかつたから、何うしても清十郎の方から忍び込ませるより道はなかつた。

「お夏さんとも相談して合圖は私の方からするとしても、姫路の城下へは清さん、日の中は入れんぞ、廣いやうでも狭い城下ぢや、何處で誰に見付かるか知れん、清さんが戻つて來たとなると、但馬屋の方で油断はせんから逢はせるにえらい六ヶ敷うなる」

「と云ふて、在所の人は餘計私の顔を知つて居ませう」

「さうよ、在所の人たちは餘計あんと馴染が深い、それなら恚うするか、これも戀故なら是非もないとして、姿を變えて十二社の境内にでも居つて貰ふか、私の方から知らせに行くにもえらい都合が好い」

「そして、何う姿を變えませう？」

「乞食の扮装でもするか、手拭で頬冠りでもしたら顔のさす心配もあるまい」

「それでは爾いふことにしませう、其代り間違ひなく逢はせて下さ

いよ源さん」

「其心配は無用ぢや、まあ大船に載つたやうな意で居なさるが好からう」

『何にも云ひません』

三三

源十郎が離座敷のお夏に逢ふたのはまた夕の七ツ過であつた。それより半刻前まで勘十郎が押しかけて居た。

勘十郎は大阪から戻つて以來、恰ど以前の清十郎のやうに九左衛門から目をかけられて、何も彼も勘十郎でなければならんやうになつて居た、それが勘十郎の慢心を増長させて、蔭では誰も彼もから爪弾きをされながら自分だけはもう但馬屋の躰養子にでもなつた氣で、奥座敷へでも離座敷へでもずん／＼入つて行つた。

『お夏さん、お退屈でせう』

此日も離座敷へ押しかけた最初の口上が恚うであつた。お夏は床柱に凭れて骨のない人のやうにぐんにやりして居た。顔は蒼褪め、眼の色が嚴くなつて、以前のやうに仇つばい、晴々した色目は微塵もなかつた。

物を云ふのも、軀を動かすのも憶切だと云ひさうな調子で、沈と勘十郎を見回つた。怨めしさうな眼の色だけは段々凄みを強めて來た。

『何か用かえ』

昂然として云つた。勘十郎は後方を見廻してから内へ入つて、

『お樂みでせう、段々祝言が近寄つて』

お夏は口も利かなかつた。

三三

「清十郎は磔刑になつても、後釜が出来てお仕合せですな、へへ、」

後釜とは龍野のことであつた。あまり執拗いので、

「それが何うしたえ」

叱るやうに云つて屹と向き直つた。

「勘十郎、そなたは私を擲楡に來やつたのか」

「誰も擲楡には來ません」

「それでなければ彼方へ行きや、そなたに用事は微塵もない」

「あなたに用がなうても、私に用事があります」

「用があるならさつさと云やらぬか」

「此間の七十兩の證文を貰ひませう」
お夏は横を向いた、忘れ兼ねた清十郎のことが、また胸一杯にな

つて眼が自と泌む。

「二三日内にまた大阪へ賣方に出ますから、厭が應でも證文を貰は

んことには、吉兵衛さんへ私の顔が立ちません」

お夏は袂を顔に當て、居た。

「それとも、艶書の返事でも貰えれば……旦那のお考えでは、強て

龍野でなければならんといふ譯ではないので、店の爲め、家のた

めになるものでさへあれば」

頭を撫で、陰に私でさへあればといふ意を仄めかして、

「それもまあ、あなたのお心一つで、私の方ではもう、艶書に認め

て置いた通りの次第ですがな」

「勘十郎」

お夏は濡れた眼を一杯に瞋つた。四邊近處へ聞えがしの涙聲で、

「そなたは私に女房になれと云やるのか、口説かれて成りませうといふやうなお夏ぢやと思ふて居やるのか」
勘十郎は四邊を憚つてチリ／＼と後方へ引き退つた。お夏は何處までもと膝行り出て、

「私には、私には清十郎といふ……」
忪えかねて泣きながら、

「二世も……三世も……云ひ交した……」

其人が磔刑になると思ふと、お夏は氣が狂ひさうになつて、其處に身を投げ付けて悶え泣に泣いた。

逢ひたい、一ト目見たいが嵩すれば嵩じるだけ、儘ならぬ身の歎きが彌増しに募るのであつた。

「逢はねば死なぬ、一ト目でも見ねば、死ぬものか」

お夏は何時も爾思つては涙を拭いた。

心で繰り返して顔を擡げると、何時の間にか勘十郎は北げ出して其處に源十郎が立つて居た。

「おう、源十郎」

「お夏さん、悦ばせることが出来ました」

「悦ばせるとは？」
お夏は不審な眼許をした。源十郎は聲を潜めて清十郎の冤罪であつたことを語つた。

「えッ、それでは源十、清十郎は磔刑になるのではないのかえ」
「磔刑どころか、十二三日目には牢舎を出たので、今もピン／＼して居ります」

「清十郎は牢舎を出て居やる、何處に、何處に、源十、何處に？」
「まあお聞きなさい、それについて、あなたに一ト目逢ひたいと云ふて」

「誰が逢ひたい？、清十郎が、あの清十郎が私に逢ひたい？、逢ひたい？、私も、私も逢ひたい……」

お夏は俯伏して泣いた。源十郎も心根を察して眼を瞬叩き、
「そこで、お夏さん、其清十郎があなたに逢ひたうて、態々此城下へ来て居ります」

「清十郎が私に逢ひたうて来て居やる、此城下へ？」

「へい」

お夏は涙で洗つたやうな顔を物凄く笑はせた。

「源十が嘘ばかり云やる、私の嘆きを不慙と思ふて、あの真らしい嘘を吐きやる」

「誰が、誰が嘘など吐きますものか、大阪の四ツ橋で逢ふて、私と同じ船で姫路へ来て、今十二社の境内で待つて居るのでございませす」

「真かえ？」

お夏は座り直した。

「嘘であつたら怨むが好いかえ」

「何んぼでも怨んで貰ひます、お疑ひなら私の首でも賭けます」
お夏は腹一杯の太息を吐いて、

「あア、夢のやうな……」
嬉し涙がぼろ／＼と頬を轉ぶ。

「それについてお夏さん、實は今夜逢ふて貰ふ手段の相談ですが、清十郎に此處まで忍ばせませうか」

「源十、早う呼んで来て給も、逢ひたい、早う逢ひたい」

お夏はもう待つたなしであつた。

「それは可けません、まだ暮六ツにもならん今頃呼んで来て、萬一旦那のお目に留つたら何うなさいます」

「大事ない、殺されても大事ない、逢ひたい、早う逢ひたい」

お夏は飛び付きたいやうな思ひで源十郎を急ぎ立てた、源十郎はそれを賺すやうに宥めて、兎に角今夜の四ツ刻を合圖に、清十郎を離座敷まで忍ばせることに定めて其處を出て行つた。

お夏は夢に夢見る思ひであつた。何度も太息を吐いては、

「はーあ、嬉しやの」
胸を抱いては悦んだ。

五〇

清十郎に逢える、清十郎が逢ひに来て居る……それが思ひ詰めたお夏の脳裡に充滿になつて居た。

清十郎に逢えると思ふと眼許が自と笑えて来た、清十郎が逢ひに来て呉れたと思ふと、立つても座つても居れなかつた。風呂を浴びて、髪を撫で、化粧をして、衣物も目立たぬやうに取替えて、約

束の四ツ刻を今か今かと待った。

人殺したの、磔刑だのと、好い加減なことを云ひふらせた勘十郎への怨みは物の數でなかつた。逢える、顔が見られる、其嬉しさでお夏は何も彼も忘れて居た。

『清十郎に逢える、清十郎が逢ひに来た』

見る物毎、聞く物毎に爾思つて、お夏は獨で笑ひ崩れることもあつた。暮六ツから、宵の五ツが過ぎて、約束の四ツが来た。お夏は離座敷で立つて見たり、座つて見たり、障子を開けたり閉めたりして待った。もう来るか、もう来るかとそればかり心待ちに待つて居た。

四ツが眞夜中の九ツ、九ツが八ツになつても、清十郎は來なかつた。明六ツが来て、夜が白みかけても清十郎は來なかつた。

清十郎は其日十二社の境内で源十郎からの便を待つて居た。無論姿を乞食に扮して、古手拭で頬冠りをして、社の裏手で日の暮れるのを待つて居た。

恰ど暮六ツ前であつた、境内の茶店の床几に掛けて、頻と但馬屋の噂をして居る人聲が聞えた。清十郎はツイ釣り込まれて一ト足一ト足側へ寄つて見ると、それが思ひも染めぬ勘十郎であつた。

清十郎は覺えず逆上しかけたが、お夏と密會のことを考えて沈と怵えながら社の裏手へ引ツ返さうとした、と、勘十郎が後方から呼び止めた。

『おい、乞食、これを與らう』

波錢を一枚掌へ載せて出した。乞食が清十郎であらうとは勘十郎も知らなかつた、不斷も、此時も、茶店の老婆へ自分は但馬屋の聲

養子になる身であることを吹聴してあつたので、其手前の外見を飾る手段に過ぎなかつたのであつたが、それが清十郎の方では爾は思えなかつた。

「勘十郎」

嚇として清十郎は云つた、乞食扱ひにされたことが我慢の臍の緒を切る導火となつたのであつた。頬冠りを脱ると勘十郎は悸然とした。

「好うも好うも人を……」

口惜し涙を手の甲で拭ひながら、

「私が、私が何時人殺しをした、磔刑には何時なつた……」

勘十郎も度胸を据えなければならなかつた。

「何時磔刑になつたツ、それより何時から乞食になつた？、それか

ら聞きたいわ」

「乞食だツ」

「乞食ぢやないか、其扮装が乞食でなうて何ぢや、お侍か、若旦那か、ふん」

鼻頭で笑はれて清十郎は手足を慄はせた、唯さへ口下手な清十郎はもう口が思ふに任せなかつた。口の代りに手が出た、戦が初まつた。

掴み合ひが初まつて、勘十郎が斃されて、清十郎が捕手に括られ

るまで僅かに一刻の間であつた。人殺しの噂を立てられた清十郎は初めて眞實の人殺しとして牢舎に繋がれた。噂は遂に現實を生んだのである。

此騒ぎは直ぐに但馬屋へ聞えた。

「勘十郎が殺された」

「清十郎が殺した」

急報が相踵いで九左衛門を驚かせた、それよりも源十郎が一層驚いた。

其夜、公儀から九左衛門を呼出しに來た、源十郎も呼び出されたお取調べが済んで、二人とも但馬屋へ戻つたのは、夜が明けてからであつた。

「お夏、勘十郎が殺された」

九左衛門が離座敷へ知らせに來た時、お夏は小綺麗な服装をして障子の隙目から外を覗いて居た。清十郎を待つて居るのであつた。

「お夏、勘十郎が清十郎に殺された」

二度目の聲にお夏は漸と振り回つた、黙つて居る。

「清十郎めが勘十郎を殺した」

九左衛門は三度繰り返して云つた、お夏は仍且黙つて居た。

九左衛門が其處を出ると源十郎が入つて來た。

「お夏さん……」

源十郎は眼を瞬叩いて云つた、お夏は黙つて笑顔もしなかつた。

「清十郎は人殺しの罪で……」

漸とこれだけ云ふと、お夏は「は、は、は」と笑つた。源十郎までが勘十郎のやうに擲楡に來たと思つたからで。

「仍且清十郎は磔刑になります」

云つて源十郎は泣いたが、お夏は取り合はなかつた。裸足で庭へ下りて裏門へ出て見た、裏門まで清十郎が忍んで来ては居ないかと思つたからであつた。

長いこと裏門で立つて居た、旭日が戀神の征箭のやうな光線を投げて居た。

其處へ城下の若い者が通りかゝつた、年頃が清十郎位であつた歩き振が何處やら似て居ると思つた。

「そこへ行きやるは、清十郎ではないか」

若い者は鳥渡振り向いただけで通り過ぎた。

お夏は何う思つても其れが清十郎のやうに思えて仕方がなかつた裸足のまゝ、其男の跡を跟けて行つた。

お夏清十郎終

不許複製

抄夏清十郎

定價金六拾五錢

大正七年四月三十日印刷
大正七年五月三日發行

著者 吉田 常 夏

發行者 築 瀨 富 次 郎
東京市本郷區駒込林町二百卅七番地

印刷者 大 澤 京 之 助
東京市神田區錦町一丁目三番地

印刷所 三 陽 堂 印 刷 部
東京市神田區錦町一丁目三番地

發行所
三 陽 堂 書 店

東京市本郷區駒込林町二百卅七番地
電話小石川二〇八四番
振替口座東京三五五番

花田 袋山 著

つれびき

△装幀高雅頗る美本
△中版上製四百餘頁
△定價金壹圓
△送料内地八錢

著者曰く

「人生に最も力強く働くものは性慾である。人間は悉く性慾の奴隷であるかも知れぬ。此の性慾好色を取扱つた者に、日本で西鶴、西洋でモオパッサン等があつてかなり成功して居るが未だ至らぬ處が多い。人生の土臺をなす偉大な力好色の世界を飽くまで眞面目に洞察し、描寫したいのが、私の希望である。之は私畢生の事業である。」



東京朝日新聞評——春雨と残る花との二篇を収む、二者とも著者衝意の境地にして、若き女の性に對する聳動の遺憾なく描かれたるを見る作者の力ある作品なり。
大阪毎日新聞評——不見轉藝者や料理屋を兼ねる温泉宿の仲居を主人公にして肉慾生活を描いた、春雨、残る花の二小説を収めて一冊とせる、大正式好色本とも稱すべきもの。
河北新聞評——著者最近の傑作にて人情の機微を穿てる獨特の觀察を流麗なる筆致を以つて描寫せるもの文藝界の花と稱すべし。

泉 鏡花 著

菖蒲 貝

▲絹表装頗美本
▲定價壹圓廿錢
▲送料内地八錢

序

名づけたる渚の貝は一枚々々其の色濃き淡き紫也。此を集美て擬ふれば花菖蒲の姿は成るこそ美しき人の手に優しき君が胸に。

本書は著者の作中より代表的なものは出世作を選びこゝに本書を刊す。寔に是れ我が文藝の精華にて不朽の名作のみなり。苟くも文藝に志す人々は必ず本書を備へざるべからず。著者の精粹は即ち此一卷中に集るものなり。艶麗を以て鳴れる著者の筆致は文學を好む其の者の普く知れる處なり。加へて畫伯青楓氏が苦心の装幀に成れる本書は蓋し机上の誇りなり。

本書内容

- △春 畫
- △袖屏風
- △夜行巡查
- △玄武朱雀
- △春畫後刻
- △歌行燈
- △處方秘箋
- △三味線堀





□ 著 吉 重 三 木 鈴 □

菊半截上製美本
定價金九拾五錢
送料内地金八錢

樹 瑚 珊

大 好 評 出 版

△著者は赤門派隨一の作家として公評
△の存する處。本書は之れ迄試みたる
△十數篇の作品中より作者自ら精選せ
△る傑作集である。されば見方により
△ては三重吉氏の全部とも云へる。例
△により装幀瀟洒文藝愛好家の書架に
△缺くべからざる好著である。賣行き
△飛ぶが如し。

内 容
 一枚の瓦
 お三津さん
 赤い鳥
 猫
 桐の雨
 女
 黒
 血
 穴

俊 田
子 村
著



あ き ら め

私が處女作を書いたのは十九の時である。そうして二十三年の時私は自分の甚だしい文藝的生活の失意から全く筆を持つ事を止めて了つた。其の時から五年後に。偶然な機會によつて初めて書いたのがこの集中の一編

大阪朝日新聞にて懸賞
二千金を得たる長篇を
初め著者會心の近業を
窺む俊子女史の全面を

「あきらめ」は私にとつて再生の記念の作なのである。即ちこの文集は私が文壇に再生してからの多くの創作のうち、六編を抜き、この記念の作「あきらめ」一編に合せたものである。「序の一節」

▲装幀優美箱入
▲菊半截四百餘頁
▲定價金九拾五錢
▲送料内地金八錢

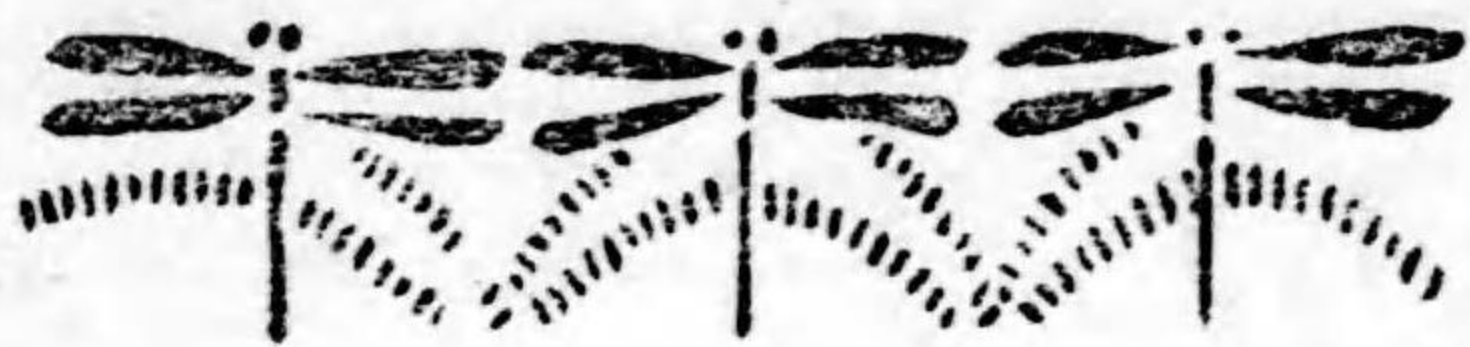
□ 本 書 □

- △ あ き ら め
- △ 木伊乃の口紅
- △ 生 血
- △ 憂 鬱 の 句
- △ 魔
- △ 女 作 者
- △ 炮 烙 の 刑

長田 著
幹彦 著
七 版

舞 姫

▲裝幀頗高雅
▲菊半截絹表紙
▲定價九拾五錢
▲送料内地八錢



本書收むる處「零落」以下九篇、悉く著者が會心の傑作なり。虹の如き美しさと、小鳥の如き愛らしさと、秋の月の如き悲しさと、冬の月の如き物凄さ、行くとして感慨無量。京の舞姫を描いては妖艶無比、漂泊の藝術家を拉し來つては凄絶類なし。或は雪深き北國に思をひそめ、或は紅燈の下に美妓と語る。實に我文壇唯一の抒情佳人也。

興味を求むる者、世態人情を研めんとする者文を習はんとするもの速かに來つて本書を見よ。絹表紙に舞姫の姿を畫ける凝りに凝つたる装幀は書齋の飾として又となし美し。

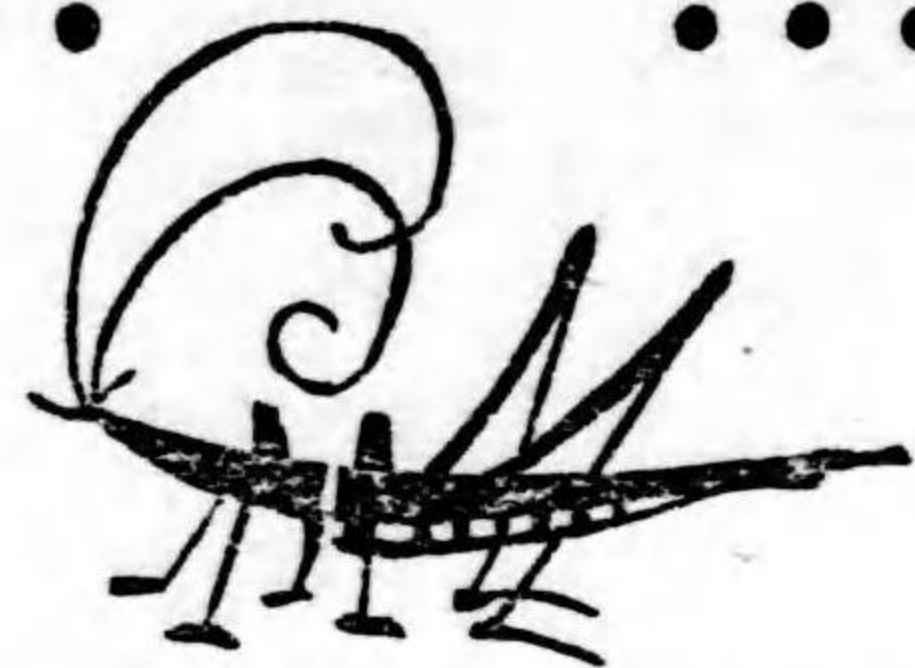
▲内容▼

- △零落
- △扇昇の話
- △雛勇
- △お鶴
- △送り火
- △尼僧光珠
- △溇
- △鳥邊山

小山内 著
薰 著
四 版

一 里 塚

△菊半截箱入美本
△木版刷絹表紙
△定價金九拾五錢
△送料内地金八錢



著者が自ら會心の作として多くの創作中から選集せられたるもので實に著者の代表作であると同時に殆んどその全集とも見る事が出来るのである。殊に此集中の「大川端」は著者一流の輕快流暢なる筆致にて巧みに人情の驥尾を穿てるものにて傑作中の傑作なり。眞に之れ時代文學の精華として永く後代に傳ふべき傑作集なり。文學を愛するもの、書架に缺く可らざる書なり。

(容 内)

- ▲病友
- ▲十三年
- ▲後悔
- ▲手空
- ▲眞空
- ▲捕縛
- ▲粘土
- ▲乞食
- ▲大川端

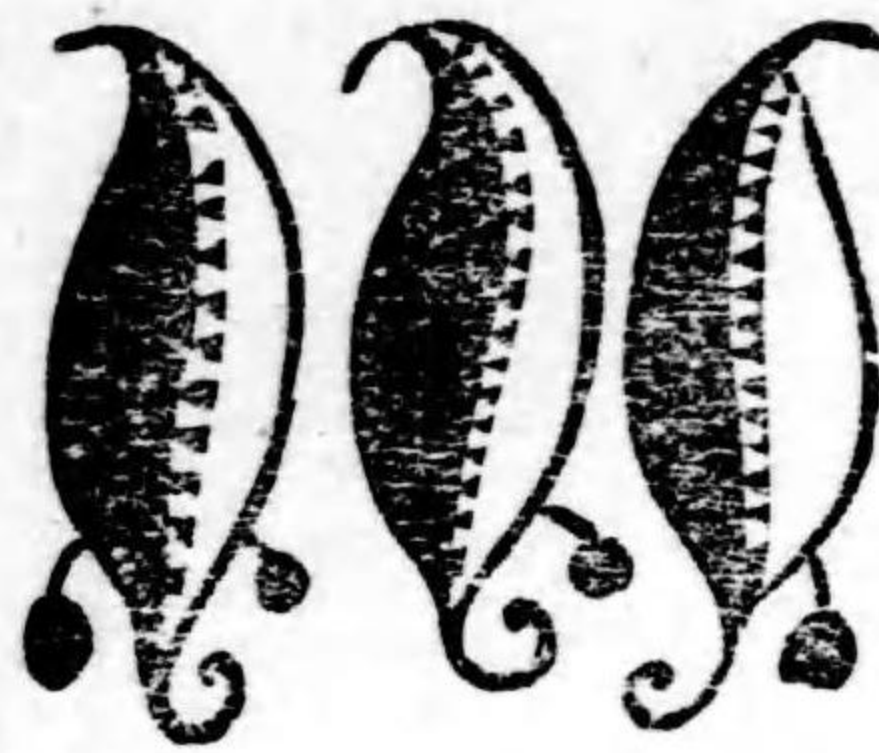


正 宗 著
白 鳥 著

ま ぼ ろ し

▲箱入高雅美本
▲定價金九拾五錢
▲送費内地金八錢

「自分の作品が不思議に世に迎へられるに甘へて知らずく小説家と人にも呼ばれ、自分も其の氣になつて了つた。三十歳前後の十年の間私は小説と云ふ事を念頭から離し得なかつた。そしてそれが自分の悦樂となる時は少なくて絶えず心の苛責となつた。一中略—此の文集を出版するに當つて、過去十年間の重なる作物を讀み過し乍ら自分の青年期の精根を消耗した記念物に對する懐しさと悲しさを感した。たどくしい筆の力てよく之れ丈けに書けたと自分の努力を思ふと共に有たけの腦漿を絞つてもこんな貧弱な物しか書けなかつたのかとも思つた。兎に角私は此文集を以て過去の汚れた記念碑として再び新しい追懷新しい苦しみを經驗するより外に生存の法もないであらうと。著者は自ら云つて居る。



本書の收むるまぼろし以下六篇は何れも著者が自ら許るす會心の傑作である、著者の藝術的深みは之れに就いてはじめて味ふことが出来る。装幀また頗る美、書架の飾りとして最も好適なものである。

本 書 目 録
△まぼろし
△微光
△毒話
△挿話
△二家
△泥人形

五 版

著者が會心の作として撰集せられた代表作四篇を收む

戀を知る頃

谷崎潤一郎著

□定價金五拾錢
□郵税金六錢

■菊半截上製箱入頗美裝■紙數三百余頁■

本	書	内	容
戀を知る頃	誕生	あくび	恐怖

十既歳に戀を解しそめて、知りつゝも女の爲めに命を墮す、童子の可憐なる初戀の此の物語りは吾が谷崎先生の深刻なる筆ならは描き能はざる處熱烈なる刺撃濃艶なる色彩を以て文壇の重鎮たる先生が代表的傑作なり新興文學に志ある人は必ずや此書に教へらるゝ新しき或物を發見するなるべし



現文壇新進氣鋭の著者が其作中より選出したる一二篇を收む

版 四

心中未遂

正宗白鳥著

□ 定價金五拾錢
□ 郵税金六錢

菊半截上製箱入頗美裝 紙數二百五十餘頁

大正新年第一の傑作として著者近來の名篇として又著者が女性を描きて最も成功せる作として評價されたるもの、近來益々悶熱の境に入りて文壇第一人の稱在る著者の筆は哀れに優しき女性を遺憾なく描盡して讀者をして思はずホロリとさする處文壇の偉觀たらずんばあらず、白壁は著者が多大の抱負を以て筆を染めたる脚本の處女作



本 書 内 容	
脚 本	心中未遂
白 壁	

十數冊の中から最も氣に入つた作物ばかり選集したるものである

版 五

ぼんち

岩野泡鳴著

□ 定價金五拾錢
□ 郵税金六錢

菊半截上製箱入頗美裝 紙數二百八十頁

大阪の若旦那が寶塚へ初めての藝者買に行く電車の中で重い怪我をする、それでも藝者を買ふのを樂しみに醫者にもかゝらず我慢して寶塚迄行つて遊ぶ描寫深刻な極め東京朝日新聞之を激賞して近來の傑作と稱し『自然主義も此處迄行かなければ駄目だ』と云ふ其他の三篇皆先生自ら從來の作中より最も自信在るものとして選出されたり



本 書 内 容			
ぼんち	巡查日記	非常時	閻魔の眼玉

文藝の精華。不朽の名作也。著者の傑作此一巻に集中せり。

版 四

影 と 影

鳥村抱月著

□定價金五拾錢
□郵税金六錢

菊半截上製箱入頗美裝 紙數二百八十餘頁

□容内書本□

脚	平 清 盛
本	運命の丘
復	海濱の一幕
競	復 讐
斷	片 争
其他二種	其他二種

讀賣新聞曰く（前略）利那的歡樂主義者として清盛を内面的に描寫したる「平清盛」ナポレオンを描くに著者一流の運命觀を以てしたる「運命の丘」の二篇は著者が發表したる戯曲中の二長篇として其内容を運ぶ技巧の圓熟と觀察の精緻には敬服すべき點多し。内に冷やかなる自覺を持ち乍らも尙ロマンチックな氣分生活をなせる人のラブレターを集めたる斷片には柔かく懐しみある情調が溢れて詩を讀むが如き快感在り。（以下略）



版 五

純容觀派の文學は著者によりて完成されたり

樂 園

田山花袋著

□定價金五拾錢
□郵税金六錢

菊半截上製箱入頗美裝 紙數三百餘頁

容内書本

樂 園	赤い肩掛	胡瓜	暑き日に	劇場で	あの花	椿の花
-----	------	----	------	-----	-----	-----

郊外の隠れ家にあひひきの夜を樂む若き二人を描ける「樂園」を卷頭に、巨匠の筆の香殊に著しいものばかり集めたもの。清梵濃艶とりに多面なる先生の特色を發揮して、止に是れ百花亂れ咲く文の「樂園」である。「文章世界評」前略「椿の花」の一篇は特にある新境を開かうとした跡があり、描寫の上にもその陰影が多く投げられてある未來派の畫を見るやうな所もあるやうに思ふ。



アルツイ作
バシエツイ作
武林無想庵譯

全譯

サニシ

▲四六判全一冊
▲總布製美本
▲定價壹圓也
▲送料内地八錢

全露青年男女の
血を沸かしめ社
會的大問題を惹
起せし世界的名
篇を見よ



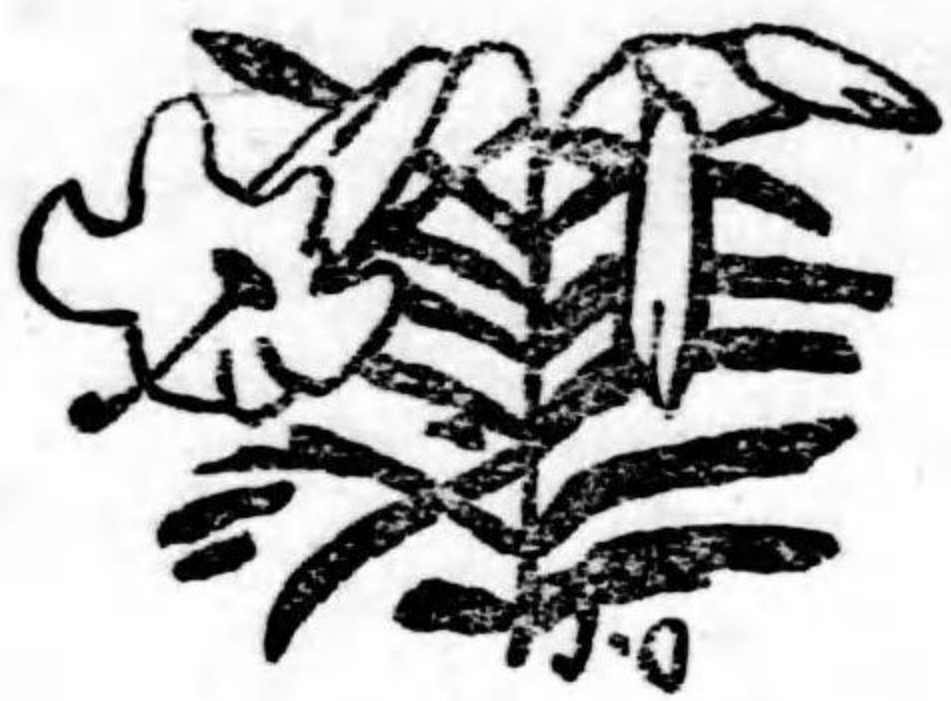
本書はアルツイバシエツの代表的傑作として各
國に移植せられ居る大藝術品である。千九百年
過後期の思想小説と銘して本書の公刊あるや、
讀書界は翁然として之に向ひ洛陽の紙價爲に暴
騰せしめた。慨があつて實に空前の盛況を呈した
ものである。主人公サニシの思想は忽ちにして
露國青年男女の思想界に影響し、所謂サニシ主
義を奉ずる男女の秘密結社が至る處に出現する
に及んだ。
其の影響の激甚なるに驚い發賣禁止
たる露國官憲は遂に本書を由々しい問題を惹き起
行者は之に處刑したたけを見ても本書が如何
に露國近代思想に深大の影響を有したか、解か
る露國文學研究家の必讀書たるは云ふ迄もない
ことである。

ドストイエ原著
フスキイ原著
生田長江共譯
生田春月版

全譯 罪と罰

▲總布製箱入美本
▲定價壹圓四拾錢
▲送料内地八錢

ニイチエの
嘆賞せる唯
一の心理學
者の一大傑
作也。



▲フリードリツヒ、ニイチエがその「偶像の微光」に
於いて「ドストエフスキイ」は我が就いて何事かを學
ばざるを得ざりし唯一の心理學者なり。彼は我が生涯
の最美なる幸福の事件に屬す」と嘆美せるを見ても著
者の名聲を窺ふに足るべし。
▲此の偉大なる著者の最も力を注ぎたる長編は實に本
書である。近代世界文壇に立つて最も強き共鳴を與へ
各國語に翻譯せられて居る。我が讀書界は唯徒らに名
のみ耳に熱して其の實を見ざりし事既に久しく偶々譯
者の努力によつて一般讀書子に提するを得たるは吾れ
人共に同慶とする處である。

世界文壇の傑作長篇の全譯！

波蘭文の世界的名著『クオワアヂス』の全譯

□ シエンキエ井ツチ原著 □
△ 縮刷ポケット形洋装
□ 松本雲舟先生譯 □
△ 金文字入天金優美箱入



改譯 何處へ行く

△ 定價 壹圓拾錢
△ 内地 送費 金八錢

□ 菊判製及縮刷通計 □
△ 六號活字總假名付
□ 第二十一版を發行す □
△ 全紙數六百六十餘頁

本書の譯者として松本雲舟氏の名聲は世既に定評がある。本書は氏が九ヶ年以前に一度出されたるものを訂正増補し、縮刷にしたものであるが、面目更に一段の光彩を添へて居る。リジアの純潔とベニチリスの戀を中心とし、靈肉一如にして、文武兼備の希臘精神の末路を描いたもので、靈と肉懷疑と信仰利己と利他の決闘史である。加之氏の、靈筆よく之を活譯し、文章平明にして暢達、靈肉一致を稱ふる人々の一讀に價するものである。美裝縮刷にして極めて心地よき手輕な本となつた。(第三帝國)

W/2
1264

終

